

「介護支援技術Ⅳ」

地域みらい学科 福祉とソーシャルケアコース

熊本 貴子

1. 教育の責任

佐賀女子短期大学の福祉とソーシャルケアコースは、介護を必要な人の心に寄り添い、その人の立場に立って考えることができ、適切に行動ができる。感性豊かな人間性と幅広い教養を身に付け、介護を必要とする人との信頼関係のスキルについて実践的に学ぶことができる。ディプロマ・ポリシーの評価項目として、建学の精神に則り、介護福祉士としての知識・技術を身に付け専門職としての意識を高めるカリキュラムが組まれ、他教科との関連性がある。

2. 教育の理念

生活支援技術では、ICFの視点を生活支援に活かすことの意義を理解し、自立に向けた居住環境、移動、身支度、食事、入浴・清潔保持、排せつ、家事、休息・睡眠、人生の最終段階における介護、福祉用具の意義と活用について基礎的な知識・技術を学ぶ必要がある。また、尊厳の保持や自立支援、生活の豊かさの観点から、本人主体の生活が継続できるよう、根拠に基づいた介護実践を行うための知識・技術を習得する学習し、科学的根拠に基づいた介護実践を行う力を養うことを目標にしている。

3. 教育の方法

生活支援技術は5つの科目に設定し、1年次に生活支援技術Ⅰとして、生活の豊かさや心身の活性化、自立支援のための居住環境の整備や対象者の個々の状態に応じた家事の自立的に行う支援の基礎的な知識を理解できるようにしている。また、生活支援技術Ⅱ、Ⅲとして、対象者の能力を活用・発揮し、自立に向けた生活支援の基礎的な知識・技術を習得する。また、実践の根拠について、説明できる能力を身につける。

さらに、2年生では、生活支援技術Ⅳとして、いままで学習してきた内容を復習し、災害時における生活支援を実践的な体験やボランティア活動を含め身に付ける。また、人生の最終段階にある人の終末期のケアと家族をケアするために、終末期の経過に沿った支援やチームケアの実践について理解をできるように設定した。

4. 教育の成果

2年生の学生34名（日本人7名と留学生27名）は、卒業後は、福祉施設で介護福祉士として勤務する学生である。施設では緊急時の対応もできる職員として勤務する必要がある。今回の授業では、昨年起きた能登半島の地震のボランティア支援の報告などで学習した内容を含め、災害時における支援を経験した学生の中から夏休み期間中に数名の留学生が被災地に炊き出し支援活動へ結びついた。また、ボランティア活動には興味はあるが、アルバイトなどで参加は難しいが、機会があれば、ぜひ参加したいといっている学生もいたため良い成果と考えた。

また、終末期のケアとして、学生は施設実習中に会うこともあったとのことで、介護福祉士を目指している学生として必要な項目を教科書を基本として、知識は身に付行けることはできたが、「死」に対する心の変化や家族ケアなどについては、十分な学習を深めることができていない状況もあった。

5. 今後の目標

学生が将来働く福祉施設では、災害が起きたときは、福祉避難所として対応が必要であるため実践的な介護を学び、普段を違った終末期のケアとして、心の変化なども含めた授業の組み立てを再度検討したい。